

映画や演劇、美術や音楽が溢れるこの街で
私はもう一度誰かと出会い直す。

のきした journal

vol.2

All human beings free from fear and want,
and enjoy freedom of expression, speech and belief.



のきしたに関わるメンバーの声、のきしたに集まるみんなの言葉。
世界が見過ごしてしまいそうな、この日常の景色を世の中に届けたくて。
みんなの表現の場「のきしたジャーナル」第2号
今回は「家出」にまつわる特集を組みました！

2023.SEP / TAKE FREE

発行：のきした

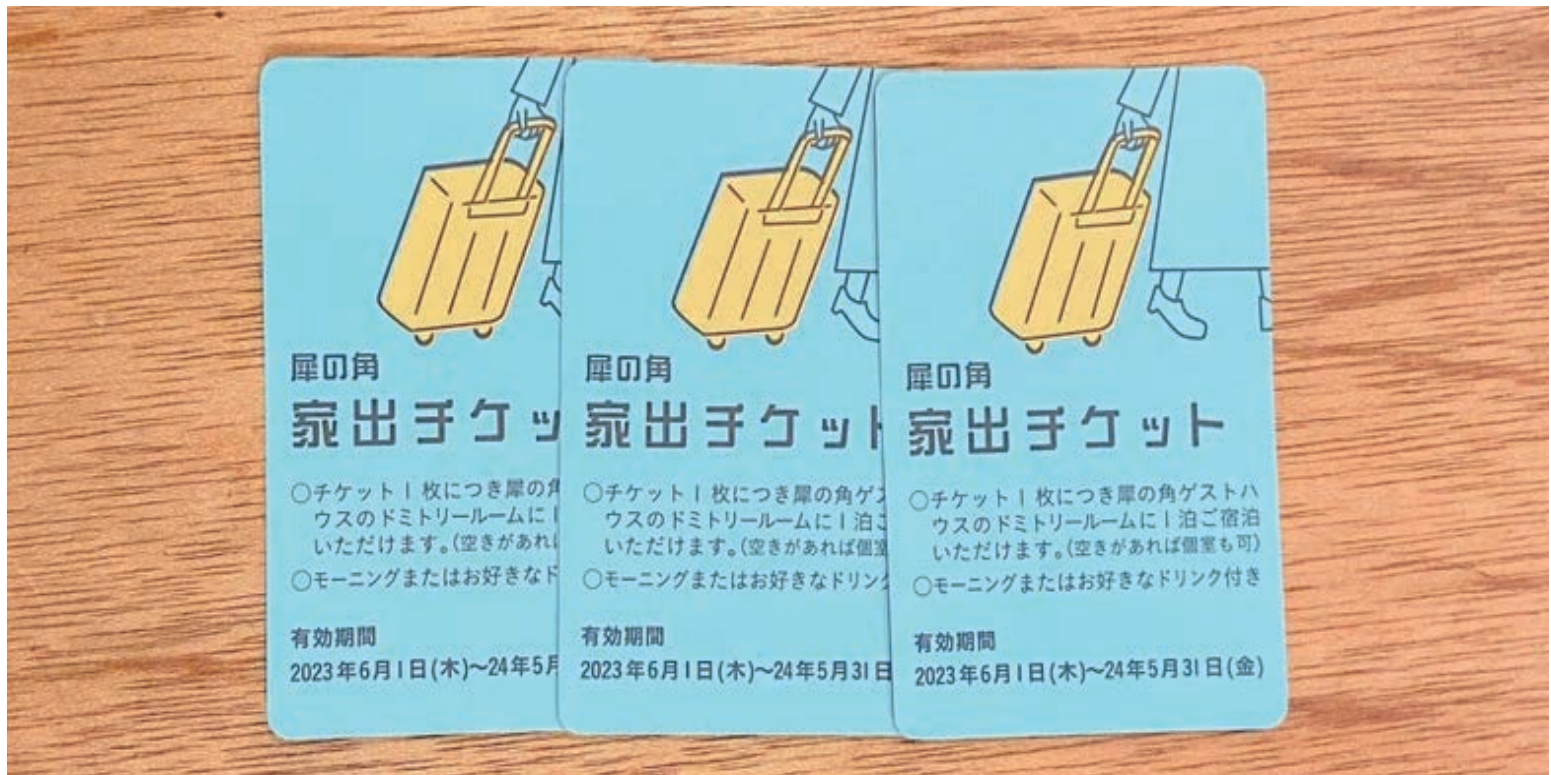


特集：「家出」にまつわる往復書簡



犀の角が「家出チケット」というものを販売し始めました。3枚(3泊)つづりで11,100円モーニング付き。買ったチケットを誰かにあげることができるのが特徴です。家を出て休んでほしい人が居た時に手を差し伸べられる道具として、またコロナ禍で依然として運営が大変な犀の角を支える寄付の仕組みの一つとして考えられたこのチケットは、今犀の角で一番売れています。

「感劇チケット」や「カフェチケット」など、劇場やカフェならではのチケットも同時発売したのに「家出チケット」が一番の売れ筋だという現象がとても興味深く、でも一方でさまざまな意見が届いていることも耳にし、今回「家出」そのものを深堀してみようと、特集を組んでみました。家出にまつわる往復書簡。家出を受け入れる側と家出する側と、いろんな立場の方たちの体験と言葉をお届けします。



荒井さんへ

家出チケット販売おめでとうございます。街のゲストハウスが家出してくる人を受け入れてくれるようになったこと。僕は嬉しくてしかたありません。いや、もともと犀の角はそういう場所だったかもしれないとも思います。一夜の宿を求めてくる人を自然に受け入れてくれる場所だったからこそ、僕らもここでやどかりハウスをやろうと思えたのだと思います。この2年いろんな人達が逃げ込んできました。一つ一つの出逢いが僕はやはりうれしかったです。悲しいことも多いけど、やはりうれしいのです。またみんなと何度も出会い直して、一緒にこの世界を問い直し、作り直せたらいいなと思っています。

PS. 家出チケットの名前がよくないのではないかとこの声も聞えてきました。せっかくなのでいろんな人の意見を募集して、家出についてみんなで考えてみたいなと思っています。

元島生 (やどかりハウス)

拝復、元島さんへ

「家出チケット」を発明したのは犀の角にとってごく自然な流れでした。むしろ、やどかりスタッフのみなさんと一緒に企画したような感覚でいます。それくらい犀の角にとってやどかりハウスの存在はもはや切り離すことのできない、大切なものになっているということです。毎日のように、自発的に家を出てきた人、出ざるを得なかった人たちとやどかりスタッフの面々が犀の角のどこかにいて、悩んだり、苦しんだり、笑ったり、歌を歌ったりしている。このことが劇場や演劇の可能性を限りなく広げてくれています。また、人間や社会について深く考えさせられています。ネーミングについてネガティブな反応もあるようですが、当然と言えば当然のことかもしれません。それよりも、家出をしてきた人たちと共に、我々はこれからどんな世界を創っていけるか、ということが重要なのだと思います。気候変動や戦争など先行きが不安な世の中ではありますが、希望も感じています。これからもよろしくをお願いします。

荒井洋文 拝



やどかりハウスとは・・・

上田市の民間文化施設「犀の角」生活相談を行うNPO「場作りネット」が協働で運営する「雨風をしのぐ宿」です。犀の角ゲストハウスの女性専用ルーム(母子も可)が500円で利用できます。息抜き出来る宿がほしい人、昼間ひとりになりたい人など、お気軽にご活用ください。(男性も空き状況によりご利用可)

LINE登録フォーム▶



about run away from home

やどかりハウスを利用するみんなから寄せられた声

日頃、やどかりハウスを利用するみなさんにも、LINEを通じて「家出チケット」の賛否両論についてコメントを寄せてもらいました。

「お家に帰りたくない時の魔法の券」にしたら？

ためき屋さん



大きな安心感が得られる

鮭はらみ.さん

家出チケット、いいと思います。

どうしようもなく苦しくて、家庭と離れることで考えや感情をリセットできる方も沢山いるのではないのでしょうか？

私自身、家を衝動的に飛び出したり、世間的に家出と呼ばれることを何度かしてしまうことがあります。自分が苦しくて精一杯なのもありますが、家の人に迷惑をかけないため、というのがあります。

例えば衝動的に家を飛び出してしまった場合、宿や行き先に困ったりすることもあります。そんなとき家出チケットを「持ってる」というのは、精神的にも物理的にも大きな安心感が得られるのではないかと思います。

名前に関しても、家出を経験している者からしたらなんの違和感もありません。チケットがあることで、「どうしようもない時にも、自分の居場所がある」と認識してくださる方が増えるんじゃないかな？



言葉の響がよくないような

匿名さん

家出チケットと言う名前はいかがなものかと、言葉の響がよくないような気がします。私の考えは癒しチケットとか和みチケットってどんなものかと一つの提案ですが、家出についてはしたことはありませんが何度もしたいと思った事はあります。日常生活の中でやりきれなくて2,3日何も考えずに過ごせたらって思います。

「生きることに直結している

人畜無害さん

「家出」いいじゃん！

その表現が気になるのか？

その行為が気になるのか？

何をそんなにも不快に思っているのだろう？

一昔前は、というか今でも家出は悪い事という概念がある。しかし、家出と言っても、公認、非公認、積極的、はじめは消極的でも前向きな動きへの変化形などいろいろある。

新海誠の映画「天気の子」は、離島から東京に家出してきた少年・帆高と、「祈るだけで晴れにできる」力を持つ少女・陽菜が出会い、運命に翻弄されながらも自らの生き方を「選択」していく物語だ。そこで語られているように、自らの生き方を選択していくために家出が必要な時もあるのではないかな？

大人も子供も、性別を超えて、逃げるのが時として大切である。

逃げれる場所があるのは、決して当たり前ではない。

家出チケットをもらうことで救われる命もある。

まさに「生きることに直結しており、ただ表現の良し悪しで判断しないでほしいと心から願う。

父の乱暴が酷く、家出しようと思いましたが、家出したあとどうすれば良いかと考え、調べて家出した人を泊めてくれる場所を検索したりしましたが、全然近隣でヒットせず、東京（遠いし、中高生の私にはお金が無く、行き方も知らない）に家出少女用？の施設っぽいものがヒットしただけでした。また、家出なにかした人を心優しく泊めてくれる方なんていらっしゃらないだろうと考え、家出を諦めるということが何度もありました。ど田舎なので、徒歩で家出しても直ぐに何処か建物へ逃げれるわけではなく、親は車を持っているのですぐに見つかってしまうだろうし、友達の家に、とかも考えましたが、車の免許を持っていないうちは簡単には逃れられない、と考えていました。

父に「(家から)出ていけ！」と言われたことが何度あったので、「本当にイエでしてやるっ！！」と思っていた時もあったんですけどね(笑)思っただけで行動に出せなかったのには何か理由があったかもしれないですね。

家出チケット とても分かりやすいので、個人的には良いと思っています。

不謹慎は言い過ぎかも…とは思いますが、たしかに後ろめたい？気持ちもあるので、「家出」とつけると買いにくいということもあるかもしれません。

「お家に帰りたくない時の魔法の券」とか…？ちょっとファンタジー過ぎますかね？(笑)

家出は生き延びる手段とも言える

サワタリホさん

私は、予測の出来ない大きな音が苦手だ。生まれ持った脳の特性もあるが、子どもの頃の「家」での体験も影響しているのかも知れない。

私の家族は、いつも緊張に包まれていた。決まった物の位置が変わると、父は激昂し、怒鳴り声を上げる。机を叩き、棚は倒される。変化に耐えられず、怒りを抑える事が出来ないのだ。夜になると両親の言い争う声が聞こえる。耳を塞いでもあまり意味はない。その日はもう眠ることができなくなる。両親は私が中学生の時に離婚したので、年数にすればせいぜい10年間程度の話だが、この頃は、ただ静かに暮らしたいと望んでいたように思う。

今は、大人になり、以前のように物音で眠れないことは無くなったが、ひとりで過ごしたい時に、やどかりハウスを利用させていただいている。静かなベットで横になり、天井を眺めていると、あの頃にこんな場所があれば、ただこうやって静かに眠れる場所があれば、、、そんなふうに考えてしまう。家とは、誰にとっても安心できる場所とは限らない。そこにいることが心身を傷つける要因にすらなる事もある。逃げる場所があれば、一時的にでも身を守ることはできる。そう言った意味で、家出は生き延びる手段とも言える。ただ、家出には危険も伴う。行き場所のない人を搾取するような人間も存在する。

チケットの名前に対し異を唱えた方は、家出という言葉に対し、危険性といったネガティブなイメージを持っていたのかも知れない。言葉の持つ多義性と現実認識のずれが齎す軋轢は普遍的なもので、それを解決していくには、地道な対話をしていくことが最善だと、わたしは思う。わたしは、やどかりハウスを支援する今回のチケットの試みは継続して欲しいと思っている。なぜなら、一人になりたいときに一人になれ、他人に言えない悩みを打ち明けれることのできる人がいる。そんなやどかりハウスという場所にいつも、とても救われているからだ。

やどかりnoteにて続きを読むことができます！

こちらに掲載しきれなかった方達のコメントを「やどかりハウスの日々」で読むことができます。右のQRコードからどうぞ！



ご寄付のお願い

やどかりハウスを継続的に運営するための寄付を随時募集中です！
詳細はこちら▶





この街で暮らす / この街で出会う



“街”との関わりは、ひとそれぞれ。みんなのフィルターを通してみると、街の姿が違って見えてくるから不思議です。今日も空には「現代社会」という、どんよりとした雲が覆っているような気がしてしまいますが、そんな空の下でも日々ひっそりとドラマチックな日常が繰り広げられていて、それはそれでとても美しいのです。のきしたに関わるメンバーが見つけた“街”の景色を少しづつお届けします。

天使はおじさんだった



えーちゃんは項垂れて僕の隣の椅子に座った。犀の角のガラス張りの前。1人掛けの椅子が二つ。街を行き交う人達と目が合う。「しんどい。誰も分かってくれない。みんな私のこと平気だと思ってる。こんなにギリギリなのに」

幼い頃から複雑な家庭環境、発達特性による困難や被害。苦しいことには事欠かなかった。それでもなんとか生きてのびてきたえーちゃんの心身は、自身を守る為に様々な防御法をインストールしてきた。防御法は精神症状とも呼ばれる。心身はいつも戦闘状態であった。それでもえーちゃんは街の中で強く生きている。

上田の街中で自分を支えてくれる関係性を次々と作るその姿に、周りは驚きと賛辞を与える。しかし本人にとってみれば今も孤独な戦場を生きているのであり、そのことを理解されないことがまた孤立感を強める結果となっていた。僕は隣で黙って聴いている。「こんなに苦しいのに。誰も分かってくれない」ぶつぶつ言いながら、自分の太ももを殴っている。今にも大声で叫び出し、外に飛び出してしまうような緊張感が場を包んでいた。

その時、ガラス張りの向こうに一人の男が現れた。車道を堂々と自転車であぐらと走っている。そしてその後ろには戸惑いがちな車たちが並走している。あきらさんだ。あきらさんは上田の路上にいる流しの包丁とぎ。カラオケが上手くて、明るい人。えーちゃんも大好きで、孤独な夜に街のベンチで朝方まで酒に付き合ってくれたこともあるそうだ。暴走族しながら車を従えて颯爽と登場したあきらさんにえーちゃんは「ぶっ」と思わず笑い、二人たまらず爆笑した。「あーあきらさん天使だわー」そう言って笑い、少し話してから、その日は帰っていった。タバコ屋では店主に禁煙をすすめられ、定食屋では独自のメニューを頼ませてもらえるえーちゃんは、やがてやどかりハウスに泊まることはなくなった。その代わり、天使の住む、この街に引っ越してきた。そして、この街で寂しさと闘いながら、今日も誰かと生きている。

もとしましよう (やどかりハウス)

袋町のこと



犀の角の北側の一角に広がる呑み屋街「袋町」。狭い路地に、居酒屋、バー、スナック、キャバクラ、ラーメン店などが軒を連ね、酔客、料理人、バーテン、ホステス、キャバ嬢、ぼん引き、さまざまな人々が行き交う。国籍もタイ、フィリピン、韓国などと多様だ。特に袋町は個人店が多く、長年営業している老舗も多い。それぞれのお店に個性があってぶらぶらと歩いているだけで楽しい。昭和な雰囲気もいい。私が呑み潰れて深夜に帰ってくると、「何故そんなに呑むのか」「こんなに遅くまで何をしているのか」と妻に真顔で聞かれる。そんなことは自分にだってわからない。ただ呑みたいのだ。近年は酒を嗜むことは避けられる傾向にある。生き辛い。断酒や禁酒を勧める類いの書籍もたくさん出版されている。酒を呑まないで時間が有効に使えるという。お金も貯まるらしい。本当か。実際、金は貯まっていないが、酒をあまり呑まなかった若い時分も金はちっともなかったがそれはどういうことか。最近の若者などは酒を飲まない人たちが多く、気安く酒の席に誘ってもいけないらしい。世知辛い。

古来より日本人は神に酒を捧げてきた。神棚にお供えした酒には神が降り、霊力を宿す。酒に酔うとは神の領域に近づくことだ。思慮分別に囚われている人間は、時に籠を外して精神を開放する必要がある。父も酒飲みで、たまに一緒に呑むことがあるが、「話をするには呑まないで始まらない。」「呑まないで深いところまで行けない。」とこの点については常に共感し合っている。酒に酔い、深く語り合う。酔いが覚めれば何を話したかほとんど覚えていない。深い海の底に潜り、海底の砂に触れた感覚だけが二日酔いで疲れきった体の芯に残る。その感覚を得たいがために袋町を彷徨のだろうか。私にとって袋町は自分の本性に気が付くために必要な舞台装置であり、セーフティーネットであり、つまり「のき」である。

荒井洋文 (犀の角)

疼きへの呼応

からだを病院から街に降ろして1か月と少し経つ。7月からやどかりハウスの活動が生活の大半になった。この間、自分の内面で女性性の疼きを感じざるをえなくなるという変化が起こっている。実は、これまで自らが女性だということ意識しなくてもいい関係性や環境の中に身を置くことが多かった。男性性や女性性というものを意識することはあっても、男だから女だからというようには世界のことも自分のことも捉えなくて済んでいた。しかし、毎日何人も女性の話を聴くうちに、底に流れる普遍的な傷みを感じ、私のからだの内部でなにかが疼くのを抑えられなくなってきている。

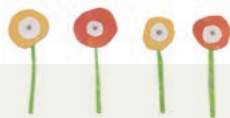
そして、その女性たちの傍らにいる男性のことを思うとき、とても複雑で言葉にしにくい怒りや哀れみの気持ちが湧いてくる。その時私の中で、女性たちは一人一人個性鮮やかに連帯しようとしているように見え、男性は一人一人の顔が無く皆同じで孤立しているように見える。これは、錯覚か。社会がそう見せているのか。私には男性の顔がなぜ見えないのだろう。

女性たちの傷つきは、暴力や支配という表に現れていることによるものではなく、実は、男性たちの孤立ゆえなのではという仮説を立ててみる。女性はその孤立に呼応するかのように、ふたりぼっちの世界で男性を受容する。男性の顔は、その時初めて女性の瞳に映し出される。ふたりの閉じられた世界に、やどかりがポッと登場した時、なにが起こるのか。よくよく耳を澄まし目を凝らしてそこに居たい。内面で疼くからだを撫でながら。

秋山紅葉 (やどかりハウス)



街の中にこぼれる種



昨年 9 月にリベルテが継続して取り組んでいる「路地の開き」というプロジェクトで市街 1.5km を 2 時間かけてパレードをした。(詳しくは前回の「のきした journal」にて。) あれからもうすぐ 1 年が経つ。福祉施設と地域の境界線を曖昧にするという、福祉や地域に対するアクションでもある「路地の開き」だけど、イベント後に地域を巻き込んだ目を引く変化は少なかった。ご近所さんとの関係性が近くなったこと、それが一番の成果だった。

パレードのスタート地点に使わせてもらったご近所さんの庭や歩いた後の路地の脇に、パレードで配ったドライフラワーの一つと同じ花を、この春に見かけた。「roji」の庭のデザインをしたガーデナーの和久井さんに聴いたら「蟻が種を運ぶ種類」の植物と言っていた。花といえばパレード以降、「roji」の庭に立ち寄ってくれるようになったご近所の N さんが「何の種類かわからないけど庭に沢山咲いているから、良ければ(アトリエの庭)植えないか?」と訪ねてきてくれた。メンバーとスタッフで何株かもらって「roji」の庭に移植していた。

「地域交流」と言ってしまう(それはそうなんだけど)、ちょっとした出来事もなんだか意味を含みすぎてしまう。ご近所さんとリベルテのアトリエの日常がパレードでこぼれた(もしくは庭から蟻が運んだかもしれない)種から芽吹き咲いた花や、ご近所さんに庭から移植された植物が場所を変え、同じ地域で生きている。(文・武捨和貴 写真・馮馳)

武捨和貴 (NPO法人 リベルテ)



むすびの日



「(寄付で集まっているのが) ジャガイモ、ニンジン、タマネギときたら…やっぱりカレーライスだよな!」「あとはフライドポテトも~」「ピーマンもたくさんあるからレシピを検索してみよう!」「無限ピーマンがよさそう!」「それにしてもこのニンジン…愛おしいほどの姿だなあ」「子どもたちに顔描いてもらおうか!」準備に集まった子どもシネマクラブのメンバーや大学生たちとのそんな会話から始まった 8 月の〈のきした - むすびの日〉。

足りない食材の買い出しチームと調理チームに分かれて、ゆるりと準備がスタート。調理チームで台所に張り付いていたけれど、「ピーマンは子どもチームに切ってもらおう」と役割を分けるべく動いてくれる人がいたり、「何かお手伝いすることありますか?」と顔を出してくれる人が次から次へと現れたり、ギターやウクレレを奏でる音が聴こえてきたり、あぁいい感じ。

カレー、フライドポテト、無限ピーマン以外にも、色んなおかずの持ち寄り&差し入れがテーブルに並び、みんなで「いただきます」の時間。はじめましての人も、お久しぶりですの人も、みんなでワイワイ食べたい人も、一人静かに食べたい人も、それぞれの場所があるのが〈のきした〉らしくて、あぁこれまたいい感じ。

食後は、スイカ割りとお花火タイム。塩田産の 18 キロもあるスイカは棒が当たってもびくともせず、思い切り振り切って地面を叩いた棒が折れてしまうという事態もあり、最終的には、目隠しをとった K くんが全力でカチ割ったスイカをみんなで美味しくいただきました。来月の 13 日はどんなドラマが待っているのかな。

野川未央 (時間銀行)



「むすびの日」とは?

一緒にご飯を作って、食べたり、おしゃべりしたり・隔てなく誰でも参加できる食事会です。その日に集まった人と何を食べるかを相談して決めたり、食べたいものを持ち寄ることでこの日の食事メニューが決まります。決まった誰かが居ないと会ができないのではなく、準備も片付けも集まったみんなで進めることで、おしゃべりが生まれ、だれかの知らない部分が見えてきて、誰かとだれかが〈むすばれる〉。そんな日をイメージして毎月 13 日を「むすびの日」としました。

『地の神』



空の頭も連れて来てしまった
咽ぶ高音が鋼に伝わり
洋灰の導通は妙に低音で
悩めた人、長椅子は彼女を抱えた
それらの煩わしさもそのままに

逃げ場のない私の心は
他人の前では現れない
それでも安全に終えたら
つまらないと愁眉を開き
何かを忘れたことだけは
確かに記憶している
立派に育った人間が前を通ったが
まさかここが家だとは

私の目は狂っていない

その地その地に瀕死の神
片羽のお陰で熱い人と
冷たい人が生まれて
こんなに空を覆ってしまった
誰かへ向けたらしい言葉達が
彼らから立ち上ってぶつかり
透かさず雷は鳴り出す

いつかの先生から聞いた
こんな日に一つ約束されるのは
この雨は花を育てるとのこと
しかしこうも頑固な基盤では
どうりで忽々な同色の草
それらの煩わしさもそのままに

そんなことより茹だる蝦の工作
この街は大きな破壊から
辛うじて生き延びている
今この時、私たちは仲間だ
全ての元凶のような遊園地
高い塔も挑む者の無事を祈っている

もう灰色には飽きた

その地その地に瀕死の神
余力のお陰で涼しい人と
温かい人が生まれて
こんなに空を覆ってしまった
誰かへ向けたらしい言葉達が
彼らから立ち上って緋い交ぜに
それぞれが変わる変わる
最高の夕方を送るなら、

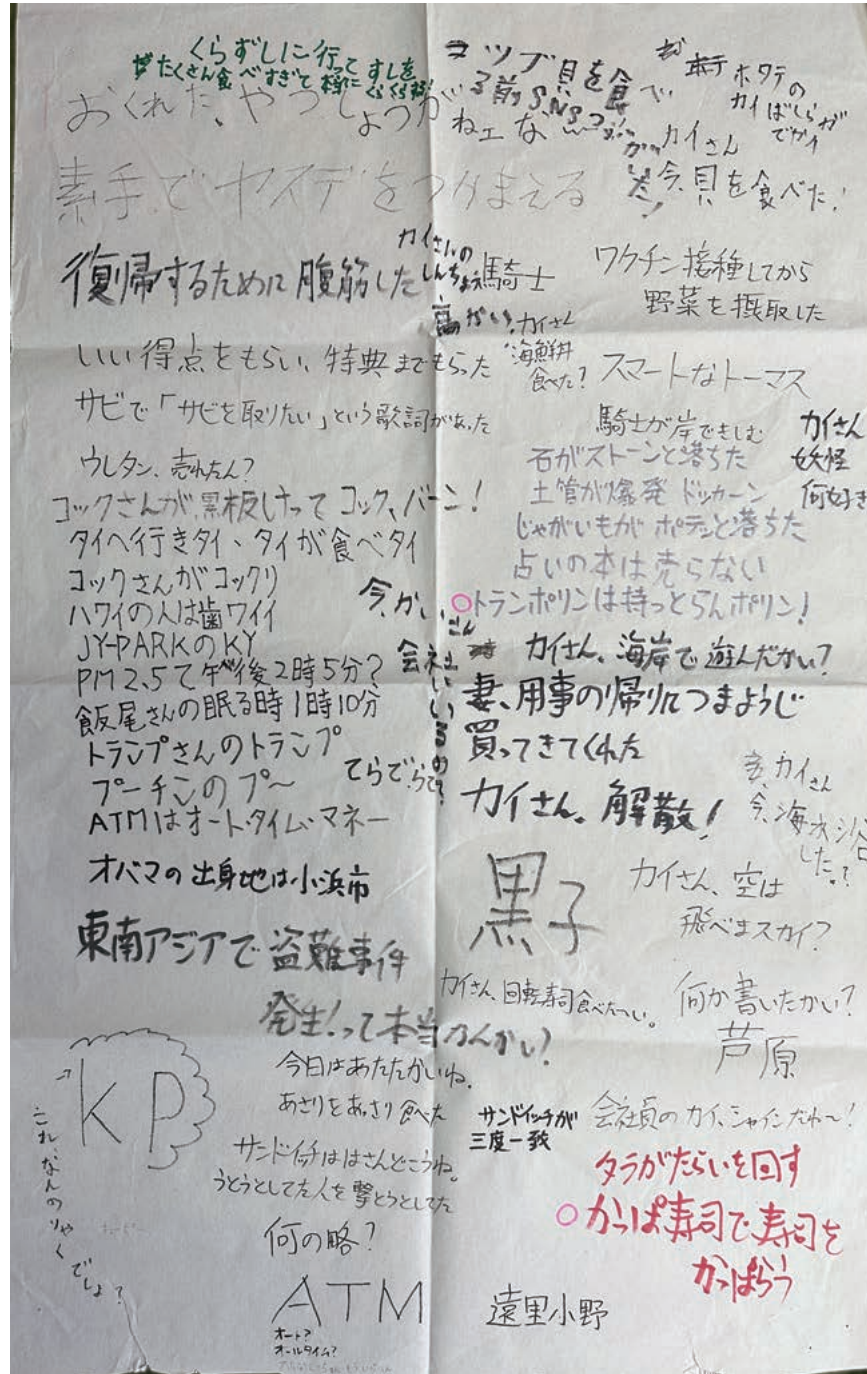
それでいい

沓掛 滉 (うえだ子どもシネマクラブ)

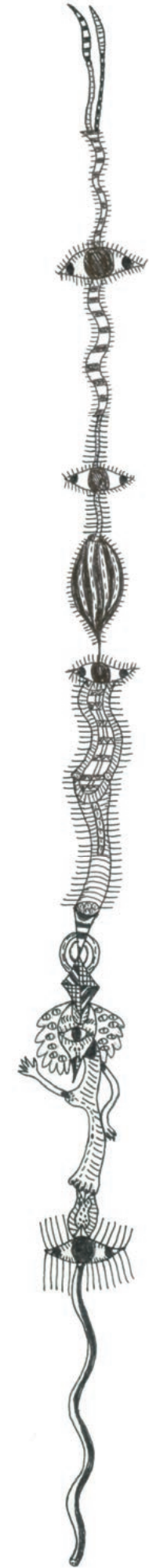
わたしのものがたり ことばとひょうげん

日々の呟きや表現など。
日常会話の延長のような、そんなやりとりのページです。

リベルテのメンバーの一人が アトリエに張り出しているダジャレ掲示板。



仲間に駄洒落・回文・難しい読み方の漢字・その感想を募っている。この掲示板が仕事の最中でも、ミツパチを集める花のようにメンバーを交代交代に呼び、静かな作業時間にポツポツと会話が生まれる。リベルテのアトリエに風通しを生み出している。これは掲示板を張り出す彼にとって、「傍を楽にする」仕事なのだ。



INFORMATION



路地の開き リベルテと世界を結ぶ街歩き

路地の開きは、福祉施設と地域の境界線を曖昧にするプロジェクト。今年はいくまで2回、リベルテのメンバーとアーティスト、市民と一緒に上田の街の思い出を振り返り地図に書き込むワークショップをしました。同時に真田の農家と協力して米作りをしています。障害があるとされる人との共同作業を通じて、参加者が各々「思い出を語る人」「暮らす人」「つくる人」という主体となり、世界とは無関係ではないことに触れていく街歩きを企画。一緒に街を歩きましょう。

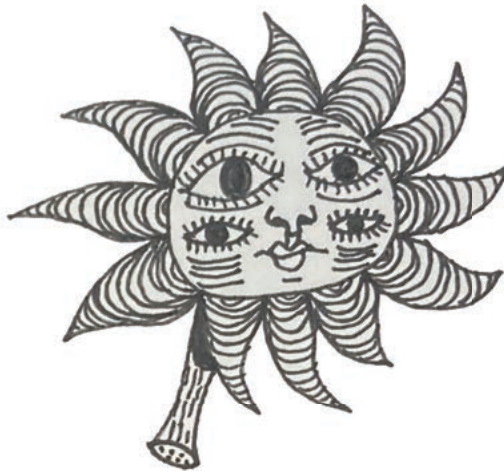
開催日：2023年10月29日(日)
予備日：11月5日(日)
リベルテのアトリエ、犀の角、上田市街を巡る「街歩き」

特定非営利活動法人リベルテ
TEL：0268-71-7358 Mail：info_lbirt@npo-liberte.org



今を生きる

わたしはたまに過去や未来を生きる
過去の記憶に浸ったり過去の渦に巻き込まれたり
未来を想像してワクワクしたり不安でいっぱいになったり
それが今の現実のようになって脳裏に焼き付く
ぐるぐる回って殻に閉じこもることもしばしば
今の現実よりさらに苦しい感情の渦に入り込むこともしばしば
最近気づいた
わたしは過去や未来に浸っても今の一瞬一瞬を生きている、
浸ることで見えなくなっているものがあると
囚われてしまっていた
変化という恐怖に追われ
変わらない過去に必死にしがみついていた
今を生きている私は
その必死にしがみつくと何かを手放したらどうなるのか
その練習をずっとしてきた
誰かに話す
やりたいようにやる
そうしたらお茶のおいしさに気づいた、
空の青さに気づいた、花の癒しを知った
気持ちや身体が今を生きる実感が少しずつ湧いてきた
今を生きていこう
この体を借りてわたしの魂が自由になっていく



わかばやし みお

大学生。自己を探求するのが癖でぐるぐる考えがち。休学中、街で出会う人々のエネルギーに「はっ」とし、自身を模索し開拓していくのが近々の自分に課した課題と楽しみ。元気がないと幼児化し主食がひとくちサイズのアイスになる。最近の好きな言葉は「小盛りごはん」

いいですか、人が撃たれたら 血は流れるものなのです。

いちばんオモロいお店にいこう。帰省した友達と一緒に、初めて袋町へ飲みに行った。
路地を埋め尽くす看板。積木、渚でランデヴー、OH BANGKOK、七賢人、熱視線
困った、オモロいお店が多すぎる。なんだこの丸出しの公衆便所は。

ふと路地から聞こえた、「は”い”、ビール”。こんなダミ声は聞いたことがない。
友達と目を見合わせた。気がつくとのれんをくぐっていた。
焼き鳥丼を注文してみた。
「めんどくさいから嫌だよ。」
「でもやっぱり、作ってあげる。特別にももよ♡ガハハハ」
常連のおじちゃんの注文を却下。
「予約あるから早く帰ってくれ」
オーダーが落ち着くと、突如始めるテレビ電話。
「はあい、あたし。元気？ひまだから遊びおいで。」
なんとまあ自由な店主だろう。

でもこれでいいと思う。我々はロボットではない。客も店員も神様ではない。
人間だ。もっと自由でいい、適当でいい。
マニュアル、機械化、AI。効率性や、再現性はコンピューターに任せておけばいい。
速さ、綺麗さより、適当さが愛おしい。

適当に触れたとき、人と生きている実感が湧いてあたたかくなる。
それは、人にしか作り出せないものだから。
人の生活と分かちがたくあるものを、分かちがたいこととして受け入れること。
もっと、もっとこの街は適当でいい。

南澤諒真

上田市出身の大学4年生。やる気のないご飯屋さんとヘンな看板がスキ。サウナの後の水風呂はちょっとニガテ。映劇で見た fishmans の映画に度肝を抜かれ、ついに9月にライブに行けることに。好きな曲は「チャンス」

雫の交差

雫が下ったのがはじめ、
蒼とした広い葉に落ちて。

誰かが葉っぱを強く弾いて、
溜まった雫が跳ねあがる。

行く
何を求めて？
流れるままに流れるしかない。

どこへ行く？
どこに行きつく？

雫は流れるままに流れるしかない
涸れ果てるのが最後だとして、
雫は、そんな運命を信じている。

そんな祈りの水場を求めて、
起きて寝床をたたむ朝。
顔を洗って、服を着替えて、
靴に履き替え、扉を開ける
独語が詰まった夜から飛び出る

何を求めて？
声と声と声と声と...
そいつらを
ごろごろと散りばめただけの部屋

ときどき近づき、あるいは離れて、
切り離されては、気にかけて。

私はただの水の雫
流れるままに流れるしかない
たったそれだけの運命を悟りに。

私は私、あなたはあなた
混ざりあったりしたくないけど、
交わりあったら奇跡でしょう。

流れるままに流れる恵
時たま交わる、そんな一点
そんな部屋に会いに行く。

何を求めて？
流れるままに。

中島晴樹

30歳 O型
好きな食べ物 / 回転寿司 / 嫌いな食べ物 / 風邪ひいてる時の食べ物全般



挿絵：しののめかぼちゃ

INFORMATION



やどかりシネマクラブ

はじまりました！



やどかりハウス(犀の角)に滞在して、
映画(上田映劇)を観て、
対話会(犀の角)に参加する。
そんな時間を、ぜひどうぞ。

やどかり公式 LINE に登録している方を対象に、毎月ピックアップ映画を2本選定して招待券をお渡しし、観てもらって感想を寄せてもらったり、対話会に参加してもらったりという試み「やどかりシネマクラブ」を上田映劇とやどかりハウスではじめました。すでに7月は「ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい」「セールス・ガールの考現学」、8月は「共に生きる」「青いカフタンの仕立て屋」が対象作品で多くの方に映画を観ていただいています。毎月対話会も行っているので、映画を観てたあと、みんなでいろんな話ができればと思っています。

9月、10月の対象作品はこちら↓



70歳のチャ・リーダー
(公開日:9/9~)



同じ下着を着るふたりの女
(公開日:9/9~)



To Leslie トゥ・レスリー
(公開日:9/16~)



炎上する君
(公開日:9/16~)



星くずの片隅で
(公開日:9/30~)

FEMINISM MOVIES WILL START FROM 26th AUG



上田映劇 × seitou 編集室

「seitou 編集室」は、明治・大正時代に活躍した女性解放運動家の平塚らいてう、伊藤野枝らの「青鞥社」からインスパイアを受け、現代のささやかな表現の場として、また自らの内なる自由と解放のために、直井恵と金久美のふたりで2023年元旦に立ち上げたちいさな編集室です。これまで『re-seitou』と名付けたzineを2回発行(創刊号は「解放」、第2号は「わたしの体はわたしのもの」がテーマ)。また小劇場「犀の角」での演劇とのコラボレーション企画や、フェミニズム本を貸し出す「seitou 書庫」、小さな対話会の開催など、メンバーがさまざまな表現の場を勝手に企画&発展させており、ゆるやかなコミュニティのような場にもなっています。



今回は、上田映劇とのコラボで、フェミニズムにまつわる映画作品全てにトークをつけるという“フェミニズム映画祭”的試みを企画しました。「やどかりハウス」のスタッフも壇上にあがったり、スポーツ、劇作家、演劇制作スタッフ等、多ジャンルで活躍する方たちに、個人と社会の間で生きているリアルを、それぞれの切り口で語っていただく予定です。監督によるトークもあります。映画をテーブルの真ん中におきながら、あらゆる対話を重ねていきたいと思っています。

のきした首脳会議

場 / のき / 表現 / アートとその担い手をめぐる冒険



芸術文化・医療・福祉などの分野において、次世代を中心的に担う35歳以下の世代を対象にして行う短期研修プログラム「表現 / 社会 / わたしをめぐる冒険」の最終日に開催する公開シンポジウムです。上田地域で活動が広がる、助け合いと新しい繋がりをつくる試み「のきした」の事例を紹介しながら、人が集まる場の必要性や既存の枠組みに縛られない在り方に向けた言語化を試みます。受講生、メンター、地域の人たち同士が対話することで、それぞれの本質を問い直しながら、それぞれの場で育む地域を発展させていく種を探ります。このシンポジウムは研修参加者だけでなく、どんな方でも参加できます。ぜひご参加ください！

登壇：元島生 (NPO 法人場作りネット副代表)、直井恵 (うえだ子どもシネマクラブ・草の根文化芸術コーディネーター)、原悟 (NPO 上田映劇・一般社団法人こども映画教室理事)、武捨和貴 (NPO 法人リハルテ代表理事)、野村政之 (信州アーツカウンシル・セネラルコーディネーター)、羊屋白玉 (アーティスト、ソーシャルワーカー)、荒井洋文 (犀の角代表)

開催日：9月10日(日)
時間：13:00 開演(開場30分前)
会場：犀の角(上田市中央2丁目11-20)
チケット料金：1,500円

一般社団法人シアター & アーツうえだ(担当：伊藤)

TEL: 0268-71-5221

Mail: info@sainotsuno.org

詳細・予約はこちら→



トークイベント(一部)をご紹介します！

9/9 いつまでも女性としてイキイキと！
荒川玲子
うえだミックスボートクラブ
70歳のチャ・リーダー
[2022年/スウェーデン/映画/85分]
監督：マリア・ホルム

9/16 人生は何度でもやりなおせる
秋山紅葉
やどかりハウス 断酒会メンバー
To Leslie トゥ・レスリー
[2022年/英語/119分] 監督：マイケル・モリス

9/23 女性と孤独 -わたしと彼女-
秋山紅葉 やどかりハウス
小林千夏 KALASO5
遠いところ
[2022年/日本/128分] PG12

9/9 <母と娘>という関係
金久美 seitou 編集室
同じ下着を着るふたりの女
[2021年/韓国/韓国語/139分] G
監督・脚本：韓・セイン

9/18 親愛なるわたしたちへ
ふくだ ももこ監督
炎上する君
[2023年/日本/42分]
脚本・監督：ふくだももこ

9/30 星くずの片隅で
よき隣人と出会う
元島生 場作りネット
[2022年/香港/115分]
監督：ラム・ワム (Cinet-Space/long)

●の日はトークイベントの日程です。当日の詳細や上映スケジュールは、上田映劇 HP にてご確認ください。
🦋は、やどかりシネマクラブ対象作品です。



学校行きづらい日は映画館へ行こう！

うえだ子どもシネマクラブ



学校に行きにくい・行くのをやめてしまったこともたちのもうひとつの居場所として映画館を活用する取り組みです。学校でもお家でも塾でもない、「映画館」という場所で、映画を観ながら語り合える機会を作っていきます。

お気軽にご登録ください！



↑登録フォーム



↑上映作品など

のきした journal

発行：のきした(NPO 法人場作りネット) 編集・デザイン：直井恵
発行部数：4000部 発行日：2023.9.1
助成：本事業は、(一財)中部圏地域創造ファンドの「新型コロナウイルス対応緊急支援事業2021」として休眠預金を活用した助成を受けて実施しています。



編集後記

世間の既成概念に苦しめられる時が多々あります。自分に起きていることはおかしいんじゃないかとか、みんなと同じようにできないわたしは、ダメな人間なのかもしれない、とか。そういう感覚はきっとみんな誰しも一度は経験したことがあるとは思いますが、日頃劇場にいて出会う人たちからもよく聞く言葉だったりします。けれど、ここに来て改めて思うのは、その概念に振り回されて落ち込むことはないのだ、ということ。それよりも、ちょっといびつに見える世間の構成要素を探ってみる。すると暴力的な社会構造や、権力の都合で作られてきた仕組みやルールなどが浮き彫りになり、この構造を保つため、現代の生贄のように“個人”が犠牲になっているのではないということを感じたりします。

今回特集で「家出」をめぐる賛否両論を扱いました。「家出」に対する世間の声がちらほら聞こえはじめたからです。家出しなければならなかった人と、家出を受け入れる人たちと、家出はよくないと思っている人たち。なにが正しいのかを証明したいわけではありません。そんなことより、日頃声が届きにくい人たちの言葉を表に出すことで、みえない社会がみえてくるんじゃないかと思って。世間からああだこうだ言われたとしても、わたしにはわたしのやり方がある、と言えたい。そんなことを思いながら第2号を編集しました。読んでいただき、様々なご意見をお寄せいただけたら嬉しいです。(なおい)